

随想

龍溪 矢野文雄先生の帰郷

仲 矢野一家の上京記に思う

東京 御手洗 一 而

去る二十六日、佐伯ライオンズクラブが、創立十五周年の記念行事として、三の丸に矢野龍溪の顕彰碑を建てたという。大へんすばらしいことである。

昭和も五十年になると、龍溪も歴史上の過去の人になつてしまつた感がある。近頃では、政治・文学・新聞学等の限られた専門家だけに対象とされている。龍溪は当時中央で一方の論陣を張つた。その主義主張は「新社会」なり、「日本人が最も不注意なる政事上の要訣」等、数々の論文で知ることができ、また政治小説として有名な「経国美談」「浮城物語」は、文庫本や単行本で読むことができる。しかし、活字だけで思惟、思考するだけでは、御土人の肌をびつたりしないものがある。

龍溪も同じく城山や、番匠の流れを眺め、人情にふれ、そこに又深の人間矢野龍溪があつたはずである。なまの龍溪を理解するには、随筆や手書、生前の龍溪を知る古老、先達の話を聞くのが一番である。しかし嘉永三年生れの龍溪が、亡くなった方の昭和六年で、すでに四十年経っているので、生前の龍溪を知る人も、段々少なくなつてきている。

そんなある日、森鏡三著の「明治人物夜話」の中に、

「随筆家としての矢野龍溪」の項を見出した。「西遊漫記」である。「西遊漫記」は、明治二十三年に龍溪が佐伯に帰つた時の随筆である。その中に「懐かしき者」と題する御里礼讃の一文がある。

「他人も定めて同標ならん。余の身にとりて故郷の如く世に懐しき者はあらず。好し其地を一片人影なき境と仮りに定むるも、唯だ其の山野溪谷と相對するのみにて、既に得し言はれぬ嬉しき心地するを覺ゆ。況んやその地の父老子弟は、總て皆相識の人ならざるなきや。余が幼少の頃、朝夕常に眼に見慣れし山頭の松樹、川畔の岩崖まで、尚且往時の姿を度せず、其俚に存するもの多し。一たび其境に入て之と相對すれば、斯る無情の木石すら、尚且余に向つて『龍溪居士、恙なきや。善くこそ帰り来りし』と物言ふが如き心地する。」

とあり、郷里を離れた者が同じく経験するところ、すべて云いつくされていようなきがする。そして政治談義より、身近な話に花が咲き、「居常煩雜なる世波に漂蕩せらるる余の身には、唯是れ楽易なる別天地に入り来るの思ひす」とあり、「取次の手数もなく、ズツと余の居間に通る親友も多く、居住の地と壞ぐし、横臥しながら打話らう間板の知人もあり。世間何れの処にか、斯く親しく懐かしき地あらん」とは、全く同感である。

次に「屢々帰郷せよ」と題してある。「余が發着の度ごとに、衆知の知友を累はすは、如何にも心苦しき限りなれば、近親の外は、何人も構はず打棄て置き、呉れよと語りしに、或知人曰く、畢竟は足下が久々に帰り来るが故に、我々も珍客として取扱ふのみ。若し之を心苦しき思はば、成べく屢々帰郷せよ」と。余は其の厚情の言外に在るき感ぜり。



三の丸に建設の
矢野龍溪顕彰碑（十月十六日除幕）
— 建設者 佐伯ライオンズクラブ —

読みたいと思っても本がない。そこには、明治二十三年頃の佐伯風物誌が視られるかも知れない。佐伯にあるかなと思ふ。

よいつけ、悪いわけ思ひ出す。これがふる里であらう。愛書家の蔵書の中にあるかもしれない。こんな時、せめて郷里の先哲・偉人の書籍位、図書館に揃えておきたらと願っている。「佐伯史談」百号のせられた長谷川先生の、「佐伯に図書館を」に全く同感である。

佐伯文庫にある。佐伯図書館にある。これがふる里への安心感であらう。そのためにも、次は後輩のためにせよと資料を集めたいと思ふ。

先哲の一文が、郷里を偲ばせる秋の夜長である。

次に、先輩諸賢にはおなじみの話である。昭和生れの会員には、あるいはご存知のない方もおられるかも知れない。明治初年の様子や、文明開化のいぶきを格好の材料がある。それは、矢野龍溪一家の上京記である。報知新聞の記者であった藤田氏が、親分龍溪から聞いた話を通して、その後を追ってみたい。

この一頂など、心しめじみとさせられるものがある。これこそ私が知りたい龍溪であった。政治を離れ、郷里を思い、ひたすら人を愛し、佐伯弁も出たであらう。困らんが眼に浮かぶようである。

ところが、全文が

「まず一行は八十二歳の祖父多門翁、この翁は白鬚胸に垂れていて、ソレを錦の袋に包んでいられた。多門翁の御内室、ソレから文雄氏がまだ二十一歳で、大小をたばさみ、同氏の許嫁、同姉姪、同弟貞雄、後の小栗氏は十歳で、頭髪は紫の打紐で束ね、若衆作りに義経袴といった格好、その他弟姪と女中若党という大家族で、長の旅路を重ね、九州大分からは、兵庫まで四すみともし九〇という日本船であった。

明治四年（三月が正しい）の服装が、時代劇の映画を見るようにほうぶつとさせる。

八十二歳の多門翁は、多分杖を用いたに違いない。自分の趣味で作られた杖は、杖は何の木を使い、水職の職人がいたのであらうか。弁当はどうしたのであらう。「食事処」やお茶屋の看板はよく絵巻物に見えるが、長旅とあるれば用意したに違いない。こんにちどうじん干し、梅干の極りめし、佐伯地方の梅干しの産地は何処であったか。な、なんて考えるのは楽しい。

文雄は大小をたばさみでいる。文雄にとって近畿までは二度目の旅のはずである。慶応四年（明治元年）には藩主と共に京都に上り、朝廷親兵に充えられて、鳥羽伏見の戦いには禁裡御門の警衛に当たり、分隊長を勤めていた。祖父から儒教的な訓育を受け、父光儀から西洋の新知識を授けられた文雄は、新時代をどう受けとめたであらうか。

ところが、佐伯から大分までの記録がない。陸路か海路か。陸路なら馬やかごがあるが、船ならば藩船か個人的に雇い入れたものであらうか。諸賢の御教示を願いたい。

大分からは日本船の「すみともし丸」という。これも乗合いであったか、当時の船の交通機関制度に興味を覚える。

る。日本船とあるから檣船であろうが、残念ながら大きな規定がない。帆の大きさ、数でも示してくれれば助かるのだが。大體中世以来、日本船の分類は大まかである。戦艦とした安宅船以外は、関船・早船・小早位で、資料的にもみるべきものがないのは残念である。

「神戸から横浜までは、外国船の『コスタリカ』(後に西京丸となつた)という蒸気船に乗り込まれた。これは前年の正月に、父長光儀さんが東京府葛飾県の知事に任ぜられたので、東京近くには官員となられたから、一家を挙げて上京に及んだわけで、はるばるの船旅だから、暴風雨に遭うと船は揺られて動かない。その間は釣也遊樂也、そのころの道中は氣樂なところがあった。」
文雄は神戸からの蒸気船で、じかに西洋の文明に触れたに違いない。もともと国内では島津斉彬が、蘭学者其作元甫にオランダの船用蒸気機圖書を翻訳させて、(八四八)江戸の屋敷で機軸の模型を造らせ、安政二年に小形船雲行丸にすえ付けて、隅田川で試運転したというから、かなりの知識はあったであろう。

明治二年版籍奉還の年、父長儀は葛飾県(現千葉県流山市)の大参事となった。ドラスタツクを变革に伴って、全国から人材を登用した頃であるが、長儀が藩の推せんによるものか、薩・長などに個人的人なつきあひがあったものか、その間の事情を知らないものである。

しにけに遭うと船を避難しながら進み、思おぬ日数を要したものである。道中すこ六が眼に浮かぶようである。そして面白い状景が続いている。

「すでに天下は朝廷のものとなつて、世界がガラリと変わった時、果知事の大家族だから、金比羅や鞍ノ津の物見遊山、氣樂この上なく、ある時は同胞、三人が馬上の檣に乘せられて、道中筋お定りの馬子が、酒手の強

諸文句をならべると、若党が怒つて、刀のツカバ手をかけ、「おぬし、什しからん奴じや」と抜きかけるなんかは、世に誦治でも、道中はまるで草双紙でも読む筋合、アリ通りの風情であつたであろう。

話が前後しているが、神戸に着くまでの話である。当時の瀬戸内海は、北廻り西廻りの廻船が往来して、賑やかであつたろう。若党が馬子相手に刀を抜きかけるなど、明治初年の一風景である。

文雄はその時どんな顔をしていたであろうか。佐伯を出発してから行く先ざきで貝聞をなめ、上京してから直ぐにも時流にだけ込む素地は、すでに心の中に蓄積されていたのではあまいか。それにしても、今日からは考へ考えられぬ大へんな旅である。しかしスピードだけが万能でもあるまい。スピードについて行けない人間の頭の方が問題であろう。郷里を思い、のんびりと思考することを教えられる一話である。

横濱上陸以後は、又譲りない。
(筆者は米水津村出身・東京都板橋区大谷コニヤ五)

おしらせ

矢野龍溪頭彭碑の建設

佐伯が、人物として他に誇るべき最高の人、龍溪の碑が、佐伯ライオンズクラブによって三の丸に建てられた。その除幕式が去る十月二十六日に行われ、羽柴副会長が代表して参列した。場所もよいので人々の眼にひきやすく、これによって多くの人が龍溪を知るであろう。

史談会としては、問題が一つある。それは龍溪誕生の地である。今建っている所、小學校の裏門(哉山)は昔は言はぬ城内で、頭から誤りである。矢野家の屋敷があつた、今の幼稚園の敷地、大田中寄りに移す(か)がある。